制服の処女（1931）

MADCHEN IN UNIFORM
GIRLS IN UNIFORM
MAIDENS IN UNIFORM

メディア 映画
ジャンル ドラマ　ロマンス
製作国 フランス／ドイツ
色彩 B&W
時間 83分
初公開日 1933/02
公開情報 劇場公開

【解説】

女性が女性同士の愛（ほのめかし程度ではあっても）を初めて描いた、キャスト・スタッフこれみなすべて女性という究極の女性映画。トーキー時代を迎えて間もないドイツ映画界の底力を感じさせる傑作。

ポツダムにある厳格教育で知られる全寮制の女学校が舞台。１４歳の少女マヌエラは幼いとき母を亡くし、軍人の父の手ひとつで育てられた。年頃を迎えここに預けられるのだ。震える少女を、担任のベルンブルグ先生は威厳をもって接しながらも、慈愛に満ちた目でみつめていた。同室の少女たちも快く彼女を迎える。そこで皆は息詰まる昼の時間を忘れて伸びやかに過ごすのだった。月夜の晩、マヌエラは仲間の一人にせがまれ、亡き母の想い出を語って涙する。そこへ注意に訪れたベルンブルク先生も同情して身の上を聞き、マヌエラを暖かく励ます。先生のおやすみのキスは皆の憧れだ。マヌエラはその夜、それを初めて受けて感涙にむせぶのだった。しばらくして、彼女の破れた下着を見かねた先生は、自分のを一枚そっと手渡した。マヌエラはまたも喜びに涙する。その感情は確かに愛と呼べるものだ。学芸会の日が来た。皆でシルラーの戯曲“ドン・カルロス”を演じることになり、マヌエラは主役である。男装のマヌエラの熱演は皆を熱狂させた。その晩の食事には生徒たちにもワインが振舞われ、感激の美酒に酔ったマヌエラは周囲を仰天させる告白をした。ベルンブルク先生を愛しています、私、幸福よ……、と。そして失神した彼女はその後先生と逢うことを禁じられた。絶望に立ち入り厳禁の階段を往くマヌエラ。手すりを乗り越えると、仲間たちの絶叫が届くや否や、彼らに制止されるその自殺行為。ここでも冷ややかな態度を取る校長に皆の視線は厳しい。もはや、去るべきは先の件の責任を取ろうとしたベルンブルク先生ではなく、愛のない校長その人であった……。先生を演じたウィークはたちまちハリウッド作品に招かれるほどの好評を博し、マヌエラのティーレも若い女性のアイドルとなった。

【クレジット】

監督	レオンティーネ・サガン	Leontine Sagan
監修	カール・フレーリッヒ	Carl Froelich
原作	クリスタ・ウィンスロー	Christa Winsloe
脚本	Ｆ・Ｄ・アダム	F.D. Andam
撮影	ライマール・クンシュ	Reimar Kuntze
	フランツ・ワイマール	Franz Weihmayr
音楽	ハンソン・ミルデ・マイスナー	
出演	ドロテア・ウィーク	Dorothea Wieck
	ヘルタ・ティーレ	Hertha Thiele
	エミリア・ウンタ	Emilia Unda

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.